

短  
歌

鮎澤 永二

生きることは愛することと美しき四季の歡びを沁みじみと言ふ  
人生も一日ひとひひと日が卒業式弥生朔日胸に思へる  
雲一つ探すに苦勞するでせうと今日の秋晴れをアナウンサー言ふ

市川 セイ

此の世から火災の無きを祈るなり今悲しみのどん底に居て  
ああこんな悲しみに会う現世をつゆ知らず生き九十四年  
家事農事九十四年余念無く勤めて悲し家全焼は

犬山 俊昭

(花舟短歌会)

放置さるる一代限りの農園の幸いなるかな自然に返る  
ともかくも「今は秋だ」の秋の色 セイタカアワダチソウの真つ黄色  
これでもかと馬蹄が迫る検眼室追われ追われてそは薄れゆく

植田 稔

太陽をいっぱい含んだ露地キュウリ自分仕込みの麦味噌つけて  
コロナ禍を元気にすごし集うのは傘寿忘れた中学仲間  
苔むした杉に囲まれ旧街道過ぎし旅人たびとの足跡を踏む

大澤 清水

紫陽花のお色直しもつつがなく久しの雨に一時つややか  
風見鶏羽根を休めて風を待つ姿ほっこり居眠りのごと  
夕焼けの肩にぽかぽか温もりの稲穂めかせる金色の道

小 笹 岐美子

(湘南藤沢短歌会)

植物園にバイカオウレン見に来ればカメラ片手の歌友と出会う  
ほのかなる香に思い出す帯広よりかつて届きし鈴蘭の箱  
暑いから涼みにおいてイソヒヨドリうちのベランダ今なら日蔭

加藤 和彦

(なぎさ短歌会)

この頃の人の名ルビが無くばムリ 漢字の味や韻律の妙  
自然保護そのままでなく人の意の好むがままに手を加えけり  
「中庸」を座右の銘と心すも時折り自問す我生き様を

唐 沢 小夜子

小さき蟬触るれば足を動かしぬ葉陰にそつと置きてゆきたり  
母想ふ友の気持ち<sup>ぢ</sup>が伝はりぬ秋の名古屋に穏やかな風吹け  
昼顔の句を遺したる叔母偲びわれも道辺の花の歌詠む

木 村 恵 理

夏祭り金魚すくいし赤衣水槽狭し時十五年

お向かいの二階の窓にポツカリとマンマル照らす仲秋の月  
外灯の元で逆さにもがくもの指さしのべしカブトつかまる

黒田良子

今日も聞く「真摯に受け止め丁寧に」業界用語か総理を真似る  
もみじ葉の香染めの色の美しく斯く散りたしと見上ぐ青空  
消ゆるかと線香花火は又弾く涙のような滴こぼしつ

小橋和子

さわさわとけやき並木の葉の揺れて五月の風と何を語らん  
降りしきる雨を見つめて朝八時出掛けむとするも足鈍りおり  
目の薄くなりたる義母の棒針でふんわり編んだセーターの手触り

佐々木波透

(渡内きらり四季の会)

みかん色の車首に日の丸はためかせバス元日の公道走る  
ウクライナの子らはロシアに連れ去らる親ごころ如何ましてその子は  
ケアハウスに五日めという友のメール明るい部屋か唄っているか

塩崎麗子

稜線に雲居の月のかかりたり花に疲れしひと日暮れゆく  
雲間より光さしこむ海面を雨の名残の靄の漂ふ  
夫の焼くシヤウエッセンは香ばしく口にはじける日曜の朝

常保恵美子

赤が好きセーター・コート・帽子・靴年を忘れる旅の目印  
春だもの8代も跳ねて見るほらほらごらん鯉も跳ねてる  
「喜怒哀楽」・一期一会も嬉しくて人に守られ生きる日々なり

高橋美津子

歩行難訪問診療月二回心安らぐ猛暑は続く  
流行病はやりやまいに若き友逝きぬ予期せぬこと何故と問い居るみぞれ降りし通夜  
友くれし菖蒲の紫あざやかなり薫風の中の景顕ちくる

竹中亮子

受験終へ孫は一気に大人びて青春切符手に一人旅  
千枚の書道紙抱へ身振ひす書いて書きまくり夢手繰りよす  
雑草と決めつけたのは誰だらう草叢にひそと露草の藍色<sup>あめ</sup>

田村孝子

束の間の余生とあらば抗わず生かされ生きて今を楽しむ  
幸せは気付かぬままに通る過ぐ木木の下枝に降り注ぐ陽の  
かけ違う残りボタンに触りつつ音信絶えし友を思いぬ

角田美香

(社福)光友会

朝明けの江の島沖に出でて見る陽を浴び浮かぶ富士に息をのむ  
朝靄の江の島沖に出でて見る深き白は三途の川かな  
秋晴れの江の島沖に出でて見るカモメの群れと釣果を競う

リサイタル指間にこぼれ煌めきて果てしなき夢ピアノの調べ  
コロナ禍も五類とは云えマスク付け思いあれこれ心定めず  
白球に若き命の漲りて高校球児燃ゆ甲子園

戸村 忠子

(声薫・調和道・歌の広場)

中田 栄子

(花舟短歌会)

この夏は異常気象に悩まざる天の乱心雨降りつづく  
起き抜けに右腕回しを二〇回猫もとなりで背中をのばす  
ハロウインの店先に並む大南瓜「食べられません」の但書付く

原 エマ

ボケ予防脳トレ問題前にして夢の中で全問正解  
トラが舞う「アレ」の達成湧き上がり天まで届け怒涛の歓声  
ボケ防止脳トレ問題前にしてコックリコックリ睡魔が襲う



前原 あつ子

(湘南藤沢短歌会)

亀の子がゆつたり水面に浮かびいる人の世界の争い知らず  
海に咲く花のようなるいそぎんちやくヤドカリさんと支え合いつつ  
夏空に響き渡れるセミの声短き命ひたすらにして

松浦 みどり

(湘南藤沢短歌会)

白梅の香り訪ねて道行けば地藏の鈴の音ひとつ鳴りけり  
夕立の彼方ににじむ遠花火の音に送られ傘さし帰る  
夕さりて灯りなき部屋に風通る蚊遣りの匂ひかすかに残し

三浦 節子

炎天を尚焼き尽くす蝉の声地上の短き命燃やして  
朝は蟬夜はこおろぎ鳴き競う昼まだ暑き季節の狭間  
青鷺の千歳川辺に佇めりそほ降る雨に身じろぎもせず

上越の峰みね雲を搔き分けて顔を出したり梅雨の晴れ間に  
雨上がり夫の声して振り向けば刈田の上に虹のかかれる  
高原の黄葉見下ろす妙高は雪化粧してしんと鎮まる

見米素子

(花舟短歌会)

森睦子

日を浴びて庭の草木に水撒けば光まぶしき立春の虹  
久久の孫らの語らい夢中なるアニメの話に我は入れず  
薫風にうの花匂うわが庭に蝶の舞いきてしばし遊べり

山本澄子

大洪水・氷河融解・森林火災どうするこれから地球沸騰  
原発の反対運動せし女ひとの庭に遺れる紅き山茶花  
はかなげな紫の花諸葛菜よ昨夜よの雨にも耐へて咲きをり